

谷崎潤一郎『刺青』に込められた「兄」の思い

——『異端者の悲しみ』削除箇所及び「妹」と「娘」(刺青)の造型について——

藤 原 智 子

はじめに

明治四十三年発表の『刺青』が執筆された明確な時期は、紅野敏郎氏・千葉俊二氏⁽¹⁾が紹介した全集未収録であった著者の創作余談を始めとする述懐においてもやや不明瞭で、初出時とどれ程の時間の隔たりがあるか特定できないが、執筆当初は除くとし少なくとも諸般配慮しつつ修正を加えて発表するまでに、血縁の証言や先行研究において妹の闘病と重なる時期があったとされている。それが「この一篇は与が唯一の自叙伝小説」(『異端者の悲しみ序』『異端者の悲しみ』(『中央公論』大正六年七月号)に書かれてあるような治癒の見込みがないとされてからか、まだ治る希望を持っていた初期か特定はできないが、“悲境の象徴であり犠牲者のような存在の妹が強く生まれ変わって寝たきりの床から立ち上がってくれたなら、すべてのことが好転するにちがいない”、というような願いを胸に秘めて創作にあたっていた可能性はないだろうか。彼の「怪しい悪夢」の中にある強く美しい想像の女性を描きながら、ふと対照的に不憫な妹への同情が去来したことはなかったろうか。

『刺青』における「娘」の造型については、谷崎の求める理想の妖婦像でありまた当時なじみであった娼婦が投影されている等言われてきた。本考察では加えてそこに彼の幸薄い妹の影を見たい。当時鬱積の中に谷崎の生活は荒れ強烈な悦びを求め、湿っぽい家族愛を憎んでいたかに見える。不幸な妹はのちに亡くなるが、無力の象徴の父と共に悲しみのそれである妹の姿を彼は見ていた。「娘」が苦しみに伏せ見せる足の裏、これはあたかも背に刺られた「女郎蜘蛛」と闘う「娘自身」のようであり、横たわる「娘」、この光景はそっくり彼が見ていた病床の妹の姿と重なる。感傷に押しつぶされぬよう、悪魔の強さを求めさせたその原動力は感受性の強さゆえ人一倍苛まれた愛情の裏返し of 苛立ちではなかったか。男を踏みつけるほどの強さを得て立ち上がり、しぶとく傲慢に生き抜いてほしい。花咲く前に死のうとする妹に「女」を謳歌させてやりたい「兄」としての思いが、「図らずも」造型させたという仮説は立たないだろうか。「お前はもう臆病な心はもっていない。男は皆お前の肥やしになる」これは人知れず妹に向けて祈った言葉ではなかったか。悪魔たりたい作者は容認を拒むだろうが、「娘」の造型を通して、まだ危うい青年であり「兄」であった人間谷崎をそこに見たい。悪魔の強さをもって「芳烈なる芸術」を生きようとする作家のエポックが兄としての愛情を含んでいた、とする捉え方をしたい。

また、『異端者の悲しみ』の中の「妹」の描写に、『刺青』の「娘」の造型と似通る箇所がある。それを示しつつ、帰納法で『刺青』創作時の谷崎の心境に言及したいと思う。

（事実の逆転）

確定とみなされる事実は、『刺青』の初出時（明治43年11月・妹の生前）、と実妹園の死亡時期（明治44年6月）、そして『異端者の悲しみ』の終結部で、『刺青』と見なされる作品がその事実と反して妹の死後発表されたこととして書かれている、ことである。

テクスト終結部で、妹は最期のわがままに「かあちゃん、……あたい糞がしたいんだけど、このままでもいいかい。」と言って「ああいいともいいとも、その俤おしよ。」と母に聞き入れてもらい、不憫に息を引き取る。その直後に「それから二た月程過ぎて、章三郎はある短編の創作を文壇に発表した。彼の書くものは、当時世間に流行して居る自然主義の小説とは、全く傾向を異にして居た。それは彼の頭に発酵する怪しい悪夢を材料にした、甘美にして芳烈なる芸術であつた」と付け加えられている。今日まで、この「ある短編」とは『刺青』であるとみなされてきたが、実際には『刺青』の発表は妹の死とは前後し、これは時系列に逆らしい事実とは異なる。にもかかわらず敢えてこの構成をとつたのはなぜか。まず一家の不幸と無念を晴らすべく役割をこの『刺青』は持っていた、と（『異端者の悲しみ』執筆時）彼が解釈していた、という順当な解釈がある。そして、もうひとつ推察されるのが、『刺青』がこの不憫な妹へ向けて書かれ（捧げられ）ていたのではないか、という盲点に近い解釈である。これらは谷崎文学に敬意をもつて接するあまり、度外視して排除している、ありふれた読み方である。この極めて凡庸かつ健全な解釈が無意識に排除され、いかに甘いかとそしりをうける危険性をはらむほど、谷崎が『刺青』にて示した文学の形は成功している証しである。「妹へ向けて書いた」というのは語弊がある。決して「妹」を描くことはありえず、あくまでも描き求めるのは「怪しい悪夢」で「芳烈なる芸術」であるが、それを押し出したのはその裏にあった悲しみや憤懣であった、という水面下の事情を指す。自然主義が隆盛を極めていた頃、それに棹差した谷崎は、決して私小説的なものを描こうとしてはいなかったはずである。であるから、兄弟愛や「妹」を描くという自発はありえない。それらは拒絶していたと断定してよい。そして、それを鮮烈に表出した『刺青』は自他共に認める処女作の位置づけを確立しているが、他でもない谷崎本人が処女作として据えたいという強い願望を持っていたと推察されることからその主題は明確になる。また、彼の描く女性に「女」と「妹」を決して混同してはならないという点も肝に銘じた上で、彼の

描く「理想」を磐石なものと捉え決して損なわないという姿勢で、創作に込められた谷崎の思いに言及したいというのが本稿の目的である。

・「自然主義作家」谷崎潤一郎…宮本徳蔵論

先のような「反自然主義」伝説を自ら確立させるのであれば、文壇のスタート地点に立ち今後切り拓いてゆく文学分野とポリシーを主張する上で、自然主義に棹差して文壇に出るその作品が「私小説」的要素を持つていては都合が悪い。そのように読まれる可能性を持つ危険因子は排除する必要がある。谷崎は『刺青』発表翌年、授業料を払えず東京大学国文科の退学を余儀なくされる。そういった逆境にあつて、追いつめられた心境の中で、「一日」という短編を書いている。これは不採用となり、彼の文学史には記されることなく終わつたが、このことが実に大きく明暗を分けた、と考えられる。宮本徳蔵氏⁽²⁾は、この出来事を非常に重く捉え、次のように考察している。

しかし、あまりの流行ぶりを目の当たりにすると、不安に駆られざるを得ない。十八、九から二四、五に至る六七年間、ほとんど神経症患者と变りのない状態が続いた。東大国文科を授業料滞納のため退学になる前後、意を決して自然主義的傾向に妥協した『一日』という短編を書いた。ツテを求めて相馬御風に送り、『早稲田文学』に載せてくれるよう懇願した。御風は出来栄について一応の評価を与えたようだが、編集部の中に反対意見が出たのだらう、原稿はやはり握り潰されてしまった。『一日』は幸か不幸か日の目を見なかったが、もしこれが採用されていたら近代の文学史は奇妙な歪みを呈したことになるであらう。思つてもみるがいい。後年の風貌からして、貧乏臭い自然主義作家潤一郎はどうにも想像しにくいのである。

宮本氏は、谷崎の「懇願」に背いて原稿が採用されなかったことが、奇しくも彼にとって「幸」であつたとする。自発を超えたその運の強さが「近代の文学史」を味方につけたと捉える。

また、氏は『異端者の悲しみ』を指して、「自然主義嫌いの潤一郎がたった一度自然主義者に変身」した、とす

る。「貧乏」と「病氣」が自然主義をささえる柱なら、それは両つながらここにはある」とし、「あまりの生なましさに泡鳴の最盛期の作ではないかと錯覚」しかねないという。

地獄さながらの貧窮を再現するためには、その方法を借りるのが一番いいと判断したのかもしれない。大正六年に発表された『異端者の悲しみ』だ。たまたま志賀直哉の『和解』が世に出て好評を博していたところで、それと比べて出来栄えの点で劣るかどうか、頻りに気にしていたという。

作中、事実と反しながら敢えて妹の死の場面の直後に配置された、『刺青』の発表。その記述は、生前に自己監修した新書版全集（昭和三十三年中央公論社版）編纂時には谷崎の意向で削られている。これは、彼の死後、復活されて初出の形で普及しているが、なぜ谷崎にとつてそれを削除する必要があったか。この締めくくりの句は、わずか三行でありながら、それまでの場面にはまったくなかった内容で、意外性をもつて実に意義深く作品を引き締めている。谷崎の主張する「筋のおもしろさ」という点からいえばあざやかな成功例である。私小説風ともいえる一定のトーンで書き進められ、終結部この展開が待っているとは予測がつかない。タイトルからも意外性を与えるもので、壮挙である。中村光夫氏⁽³⁾は、「彼の実生活をそのまま再現したいわば純粹な私小説」とするが、そのようなそれまでの日常の描写を払拭するだけの効力を持つ、実に印象の強い記述である。この部分があるとはいでは、作全体のバランスが大きく異なり、削除すればインパクトを失うのは明白である。事実関係と相違しながらも、敢えてこの仕立てにしたのは、作品の完成度を考慮して計算された結果であったとみなしてよい。また、それと同時に結局最終的に書き終わったのは、その三行であった、という逆説も成立つ。それほどにこの三行は生きている。それを、後になって作品の重心と切れを失うと知りつつ敢えて削除したいと望んだのはなぜであったのか。宮本氏（前掲）のように、文学史を書き換えるほどの「危惧」を他でもない谷崎が抱かなかったとは言い切れない。『刺青』が、実は妹のために書か

れた（捧げられた）、また、「自己の生活の直接の救済を念願として書くという私小説の本道」（中村光夫）などと勘繰られては構想が崩れる。自らの作り上げた作家としてのあらまほしき理想像に多大なるダメージを招くことになり、今後の主張にも精彩を欠くことが危ぶまれる。そのような危惧をもって、作品単体の完成度を損なうことは承知の上でクライマックスと言える終結部を取って削ろうとした、とは曲解かも知れぬが考慮の及ぶところである。

一、「唯一の自叙伝小説」『異端者の悲しみ』の位置づけ

『異端者の悲しみ』は、基本的に二つの意義を具えている。一つは、自己存在の究明と強烈な自負の表出である。そして、もうひとつの意義は、異例なる長文にて谷崎自身（『異端者の悲しみ序』および『異端者の悲しみ』はしがき）、及び係累（実弟谷崎精二氏・同谷崎終平氏著書他）が言うところの「自叙伝」的役割である。

研究史を見るかぎり『異端者の悲しみ』は作品個体としての完成度は決して高く評価されているとは言えないが、自他共の主張により「唯一の自叙伝小説」としての位置づけにおいて重要視されている。内容に関しては、前記のように事実とは異なると思われる点も認められ、この考察では年代及び事実特定や人物特定を目的とするものではないが、当時のそれぞれの関係性および心境を理解し推察する上で極めて有効であると思われる。先行論を指標とし、判断材料として残された事実であるテキストに即して考察を進め、帰納法でひとつの仮説を導きたいと思う。

前者意義に関しては、

虫けらの如く生きてゆく貧民の間に伍して、何等の自覺もなくその日その日を過して居られる人間とは譯が違ふ。自分には偉大なる天才があり、非凡なる素質がある。（略）彼も亦、現實の世に執着しつ、どうにかして樂しみを求め出したかった。さうして其れが、彼には必ずしも不可能な事とは思はれなかった。（略）寧ろ反對に、思ふ存分の富と健康を獲得して、王侯に

等しい豪華な生活を営み得る身分になれたなら、この世は遙かに天国や夢幻の境より美しく美しく感ぜられるに違ひない。

(略) 彼は世の中や生命に失望する気にはなれなかつた。(略) たとへ彼が恋愛に溺れて命を捨てる事があつても、それは恐らく、恋人の爲めよりも自己の歡樂の爲めに献身的になるのであらう。随つて彼は親切とか博愛とか、孝行とか、友情とか云ふ道徳的センチメントを全然欠いて居るのみならず、さう云ふ情操を感じ得る他人の心理をも解する事が出来なかつた。(略) 「友達に限らず、自分以外の人間と云ふ者は、自分に對してそんなに強い影響や感化を及ぼし得るものではない。自分と彼等とは何處迄行つても、たゞ表面の、いゝ加減な接觸を續けるだけに過ぎないのだ。(略) 彼らの社會から畏敬されたり、信賴されたりする事が、どれだけ己の眞価に關係するだらう。どれだけ己の藝術的天分を裨益するだらう。

というような本文々言から読み取れるが、笠原伸夫氏⁽⁴⁾の「己れ自身の存在の根拠、いうなれば自己究明、自己確認の試みを、私小説的発想のもとにはたそうとする。」「異端者の悲しみ」がそれだ。」という指摘や、

石割透氏⁽⁵⁾の「瀕死の妹が身を横たえる没落した家という、死臭に充ちた自己の育った環境を描き、自己の内から、「悪魔主義」とよばれる、「黒い曇天を背景にして咲き誇る絢爛たる牡丹の美を開顯した」(三島由紀夫氏) 作品が生み出される必然を自ら語った楽屋落ちの小説として読める。」とするものがほぼ定説とされる。中村光夫氏は、「特に『異端者の悲しみ』は、彼の実生活をそのまま再現したいわば純粹な私小説であり、谷崎の作品には珍しい例外として、昔から人々の注目を引いたもの」とした上で、次のように辛らつに批判している。「私小説を信ぜずに私小説的潮流に棹さした作家は、いわばこの特権をただ利用している」とし

(以降傍線：すべて筆者)

谷崎がこの作品を書いたのは、そこに描かれた生活を送つていたころより十年近く後のことで、その間に彼は作家としての自己と名声と確立してしまつた。したがつて『異端者の悲しみ』は作者が自己の生活の直接の救済を念願として書くという私小説の本道からやや外れた作品であり、ここに無意識のうちに付きまとう成功者の回顧めいた臭みが、その文学的価値を、例えば「和解」などに比べて著しく低いものにしてゐるのですが、しかしそのことはこれが彼の青年期の生態の正確な記録であり、芸術家たる資性の精緻な計算書であるのと矛盾しません。

「彼があの作品を自ら愛惜する所以は作そのものよりも作中に書かれているその当時の生活の思い出が深いのであらう」と佐藤春夫も言います。告白は動機の本質性において欠けるところがあったにしろ、その内容については作者はあくまで誠実であったのです。

という多面的な評価を下し、「彼の文学の特質と、限界をはつきりさせ、その性格を明確につかむために、僕等はまづこの異常な個性の形成された過程に立會つて見る必要がある」と、谷崎文学の本質を究明する手段として見なしている。また、もう一方の作品意義「自叙伝」的役割と捉える上では、末弟谷崎終平氏⁽⁶⁾の、

兄の唯一の写実小説は、私は『異端者の悲しみ』だと思ふ。多少の滑稽感的誇張はあるにしても、實際を活写している点でも、また我々一家のもつとも貧乏時代であつた神田の長屋住まいの惨めな記念としても忘れられないのである。(略)

父は蛸殻町の「米店」から茅場町、箱崎町などと、転々と引越して退敗し、神田の裏神保町の長屋に引き移つた。この時が一番父の貧乏時代だつた。長女園が数え年十六歳で亡くなつたのがこの時代、(略)

といった証言や、後に早稲田大学名誉教授となつた、次弟谷崎精二氏⁽⁷⁾の、

妹の葉代にも事欠いた程、私の一家が窮乏した時代であり、兄としても一生涯最悪の時代だつたと思う。失恋やら、貧苦やらで兄は神経衰弱になつて毎夜眠られず、夜中にそつと台所へいつてさかしを(料理に使う最下級の酒である)をがぶがぶ飲んだ。

といった証言が裏付ける。両者とも同様に『異端者の悲しみ』の内容を実生活の「写実」と言い、また当時を一入懐かしむ。同時代を共有した同志として、描かれてある内容の共感を呼ぶ点が認められる。

・『異端者の悲しみ』の主題

しかしながら、明確な齟齬も含め事実との食い違いがあり、決して事実そのまま、というわけではない。たとえ

ば、家族構成であるが、登場人物は父母と谷崎本人と見られる主人公と妹の四人である。この「四人」という配置も意味深長である。発表時の予測せぬ母の死によって、結果的に『異端者の悲しみ』は母にささげる体を取った。しかし、母の死は執筆最中には想定されぬ出来事であり、確定していたのは既に数年たつ妹の死だけである。（発表は大正6年7月だが、執筆（成稿）は前5年。母の死は同6年5月である。）次章に考察するが、父母と妹とはその扱いが明らかに異なっている。のちに谷崎文学の特質とされる、母を崇拜する気配は、この時点ではまだ見られない。ここでは母に対し「いぎたない」「だらしなない」といった形容が見られる。「いぎたない」に当てられる漢字は寝・穢である。母を含め、父母はきわめて凡庸な小市民として捉えられており、一方妹は病人でありながら決して侮れない、哀れであるだけではない、不思議な空気をもった存在として、云わば、市井に「生きる」人々と、違う世界に「棲む」者との差異であるかのように、完全に区別して描かれている。また自らも「異端者」と名乗りながら、この両親同様あわてたりしくじったり、そして「言い訳」をしながら「みつともなく」生きている。彼女は終日床に就いていながら、奇妙な引力をもって場面を印象づけている。そのような求心力を持っているのはただ一人、自ら「異端者」と称しながら父母と一括りにされている章三郎（主人公）を含む、世間に混じって生きている他の三人ではなく、妹「お富」である。この点から、他の兄弟は舞台から省かれ、父母および本人は「こちら側」の「不思議でない」人間とするならば、これは「妹」のために書かれたものであると言える。四人構成において、四―三―一（人）。その「一」が作品の重心と捉えてよい。彼女の描写が不思議な重みを持つのと並行して章三郎の、今はもう届かぬ彼女に対する心境の弁明の箇所も多い。粗暴な態度の裏の「本心」を何度も弁明している。その意味で、『異端者の悲しみ』は妹へ向かって書かれたものであるといえる。事後、母の死というアクシデントにより、「母に捧げる」形となったという体を結果的にとることになった、というに過ぎない。

窓から差し込む初夏の真昼の明かりが、仰向けに臥て居る自分の眼瞼の上に輝いて、それがこのような白鳥の夢となつて居る。(略)「夢だの空だのはあれ程美觀に富んで居るのに、どうして己の住んで居る世の中は、こんなに穢いのであらう。(略)彼の住んで居る家——日本橋の八丁堀の、せせこましい路次の裏長屋にあるこの二階の一室には、西の窓から望まれるあの壮快な空を除いて、外に何一つ美觀を起こさせるものはないのである。(略)息苦しい室内に一年中鬱積して居る湿っぽい悪臭は、其処に起居する人間の骨の髄まで腐らせそうに蒸し暑く臭つて居る。もしこの部屋にたった一つしかないあの窓から、僅かにもせよ蒼穹の一部分が見えなかつたら、章三郎はどうに氣が狂つて死にはしなかつたかと危ぶまれる。

これは冒頭であるが、『異端者の悲しみ』には以降、室内の描写が多く見られる。「一階」「二階」「窓」という三つの単語が繰り返して出てくるが、これは単なる室内の光景描写というだけではなく、登場人物の一家にとつてまた作者本人にはひとしお、何やら特別な意味を持つものであるようだ。この三つの単語をキーワードと据え、特別な意味が込められていることを指摘してゆきたい。

また、「一階」に寝たきりの妹の描写も、単なる哀れな病人というだけの一括りにできない、主人公を畏怖させるような不思議な威圧感を持った存在として描かれている点も特記すべきである。

二、『異端者の悲しみ』妹お富の描写について

・『刺青』の「娘」の描写との重なり

谷崎終平氏(前掲)は、「前記の『異端者の悲しみ』に怜悯な娘が結核で寝ている場面が出て来るが、この娘が長女園で母が一番可愛がっていたようだ。」と述べる。(略)

やがて重苦しい溜息をついて、のそりのそりと急な梯子段を降りて行つた。玄關の二畳の次ぎに日当たりの悪い六畳の居間が
あつて、そこに肺病の妹のお富が、夜着の襟から青白い額を見せつつ静かに仰向きに枕に就いて居る。

とあるように、彼は「二階」に居場所を得てあり、病人である妹は「一階」の住人である。

ねえかちゃん、かあちゃんてば！・・・

終日天井を仰いだまま、暗い寂しいの中で母を唯一の相手と頼み、母との会話によってわずかに無聊慰めて居る。自分の死期が、つい一二箇月の後に迫ってきたらしい予感に脅かされて、何となく悲しかったり、心細くて溜まらなかつたりするときは、不意に甘えるような声を出して、「かあちゃん、かあちゃん」と話しかける。

「あいよ、あいよ」母がおどおどしながら障子越しに答えると、彼女は「ちょッ」と舌打ちをして、

「かあちゃんたらほんとに犢だねえ。さつきから呼んで居るのに、いくら用をして居たって聞こえそうもないじゃないか。」こ
う口汚く罵って叱り付けたりする。

という、幼さも残す不憫な病人であるが、その一方で次のような表現が多く見られる。

章三郎が這入つて来ると、病人は凹んだ眼窩の奥に光って居る凄惨な瞳を、ごろりと一方へ廻転させてじろじろと兄の様子を見すえた。「とても助からない病人である。もう一月か二月の内には息が絶えるに極まつて居る」そう知つて居るせいか、章三郎はこの妹の、奇妙に冴えた神秘的な眼の色で睨まれるのが恐ろしくて、便所へ行くのにも是非ともそこを通らねばならないのを、この間から何となく気詰りに感じて居た。彼は成るべく視線を合わさないように、横を向居て急ぎ足に縁側へ通り抜けると、厠の戸を開けて中へ隠れたきり出て来そうにもなかつた。・・・

妹の描写には、時に病人らしからぬ形容がなされており、それが『刺青』にある「娘」の描写と連なる箇所がある。次に表に書き出す。(以下傍線：筆者)

『異端者の悲しみ』における描写	『刺青』における描写
<p>もともと①十五六の子娘にしては恐ろしい程にませた伶俐な子であったのが、不治の病に陥つてから一層神経過敏になつて、頑是無い子供のような我が侬を云い募るのを、母は尚更不憫に覺えて快く許して居るのであつた。</p> <p>「瀕死」と云う薄気味の悪い武器を提げて、親兄弟に悪態をつく彼女の態度に接する</p>	<p>つひぞ見馴れぬ小娘が這入つてきた。</p> <p>①年頃は漸う十六か七かと思われたが、その娘の顔は、②不思議にも長い月日を色里</p>

と、折角起りかけた同情もたちまち反感に変わってしまった。

「馬鹿！子供の癖に余計な事を云うな。可哀そうだから黙って居れば、好い気になって増長しやがる。病人なら病人らしく、蒲団でも引被って小さくなって居ろ。もう直き死ぬ人間でも生意気な奴は大嫌いだ。」

彼は思い切った怒鳴り散らしてやりたいことが度び度びあった。彼女が死ぬ前には是非一遍、頭ごなしに打ち凝らしてやらなければ、腹が癒えないとさえ考えて居た。

ところへ丁度便所の叱云を聞かされたので、章三郎はむかむかしながら猛悪な目つきで病人の顔を睨みつけたが、②例の物凄いい、不思議に落ち着居た、③西洋の魔女の持つて居そうな冷静な瞳に睨み返されると、やつぱり氣後れがして黙ってしまった。今妹とけんかをする、あの怪しげな、じつと自分を見詰めて居る瞳が、やがて彼女の死んだ後まで長くこの部屋に残って居て、夜な夜な彼を睨みつけるに極まって居る。外の人なら知らぬこと、憶病で病的な神経を持つ章三郎にとつて、それは確かに有り得べき事実、あまりに明らかな事実である。少女の癖に母や兄を嘲り罵るのは不道徳な行為に違いない。死にかかつて居る病人であつても、悪事は悪事だから叱責するのが当然であるのに、この病人はなぜか奇妙な強みを持つて居て、叱つた者が却つて良心の呵責に悩まされる。——それを知つて居る章三郎は、いまいましいとは思ひながら、結局虫をこらえて居るより仕方がなかった。

父と母は病人の富の床を挟んで、正体もなく軒を書いたり口を開いたりして眠つて居た。苦勞性の親父も、泣き虫のお袋も、おかしいことには昔から馬鹿に寝つきのいい人々であつた。章三郎は昼も夜も大理石の臥像のように仰向居て居る妹の寢息を窺ひながら、首尾よく枕元の徳利をさらつた。

④彼はぼんやりと部屋中央に突つ立つた俣、三人の寢姿を見下ろして居た。(略)垢だらけな、ぼろぼろになった銘仙の搔卷の裾から、骨張つた日本の毛脛を露出して、萎えた花弁のような足の甲を天井に向けながら、無心に眠つて居る父親の頬は、眼窩と齒並びとが見え透くほどに落ち窪んで居る。生きた男の寢姿と云うよりも、飢え死にをした人間の軀に近い恰好である。(略)

彼らはさながら、章三郎の足元に身を横えて、わが子の情けと救いと求むるが如くで

に暮らして、幾十人の男の魂を弄んだ年増のように物凄く整つて居た。

国中の罪と財との流れ込む都の中で、何十年の昔から生き代り死に代つたため麗しい多くの男女の、夢の数々から生まれ出づべき器量であつた。

それは、③古の暴君紂王の寵妃、末喜を描いた絵であつた。(略)今しも庭先に刑せられんとする犠牲の男を眺めて居る妃の風情と云い、鉄の鎖で四肢を銅柱へ縛日つけられ、最後の運命を待ち構えつつ、妃の前に頭をうなだれ、眼を閉じた男の顔色と云い、物凄いいまでに描かれていた。

娘は暫くこの奇怪な絵の面を見入つて居たが、知らず識らず其の瞳は輝き其の唇は震えた。怪しくも其の顔はだんだんと妃の顔に似通つて来た。娘は其処に隠れたる真の「己」を見出した。「この絵にはお前の心が映つて居るぞ」(略)

「この絵の女はお前なのだ。この女の血がお前の体に交つて居る筈だ」と、彼は更に一本の書画を展げた。それは「肥料」と云う画題であつた。画面の④中央に、若い女が桜の幹へ身を寄せて、足下に累々と斃れて居る多くの男たちの屍骸を見つめて居る。(略)

あった。

「章三郎や、どうぞ私たちを助けておくれ。お前は私の子ではないか。広い世間にお前より外、私たちを救ってくれる人は居ない。どうぞ私たちを可哀そうだと思っておくれ。どうぞ心を入れ替えて、私たちに孝行をしておくれ」――

「これはお前の未来を絵に現したのだ。此処に斃れて居る人達は、皆これからお前の為に命を捨てるのだ」

病人の妹「お富」は、幼い少女でなおかつ儂い命の宿命にありながら、①「十五六の小娘」である一方で、②「例の物凄い、不思議に落ち着居た」また、③「西洋の魔女」といった形容がされている。女として生き様さえまだ露呈していない年齢でありながら、「物凄い」といった形容がなされるのは、病人であることを加味する上でも奇異な印象を与える。

奇しくも、『刺青』の少女が同年の①「年頃は漸う十六か七」であり、②「不思議」に「長い月日を色里に暮らして、幾十人の男の魂を弄んだ年増のよう」と造型され、同様に「物凄く」という形容がなされている。年端もいかな少女に当てるには、いささか奇異な印象を与える。このような気配を持った少女はそう多くあるとは思えないが、奇しくもこの両者にこのような形容が当てはまっている。さらに『刺青』の娘が再び「物凄」いまでの③「古の暴君紂王の寵妃、末喜」と似通うと造形される一方、妹は③「西洋の魔女」と比喩される。

④「画面の中央に、若い女が桜の幹へ身を寄せて、足下に累々と斃れて居る多くの男たちの屍骸を見つめて居る。」「これはお前の未来を絵に現したのだ。此処に斃れて居る人達は、皆これからお前の為に命を捨てるのだ」という記述が『刺青』にあるが、その構図は『異端者の悲しみ』において

④彼はほんやりと部屋の中央に突っ立った俣、三人の寝姿を見下ろして居た。(略)垢だらけな、ぼろぼろになった銘仙の掻巻の裾から、骨張った日本の毛脛を露出して、萎えた花弁のような足の甲を天井に向けながら、無心に眠って居る父親の頬は、眼窩と齒並びとが見え透くほどに落ち窪んで居る。生きた男の寝姿と云うよりも、飢え死にをした人間の軀に近い恰好で

ある。(略) 彼らはさながら、章三郎の足元に身を横えて、わが子の情けと救いと求むるが如くであつた。

という箇所、章三郎がすでに取つたものである。それが、彼でなく、彼女を挟んで屍骸のように斃れている父母の中心にいる、妹と取つて代わることも想定可能である。

また、「蓄音機」が何度も出てくるが、これも暗示的なモチーフとして使われている。妹は一家の中でもっとも年少であり、寝たきりで動くこともできないながら、誰一人としてろくに触ることすらできない「蓄音機」をただ一人操る、という不思議な能力を持った存在として描かれている。またにも「弾条」を捲く力もなく母にそれをさせながら、器用に「自ら針の付け換えに任じたり、音譜を円盤に嵌めたり」する。その光景は、「その傍らに父と母とが頭を垂れて謹聴して居る光景は、どう考えても一種の奇観」を呈し、「その時の娘の顔は、恰も不思議な妖術を扱う巫女のように」またも「物凄」くあり、「親たちは又、その魔法に魅せられた男女の如く愚かに見えた」というように、君臨する『刺青』の女の造型に連なる構図がある。「そうして蓄音機と云うものが、「凡人」のあずかり知られぬ靈妙神秘な機械のごとく扱われて居た」という、それを思いのままだ一人操る、不思議な能力と支配力を持った造型が、一病人である妹になされているのである。「魔法」を持ち、他の者に許されない武器をもつて、畏怖させる、『刺青』の娘に似た位置づけと言える。自らを「天才」に恵まれた「異端者」と称しながら、章三郎は、「凡人」のあずかり知られぬ靈妙神秘な機械」を、病人の妹の決して追つて来ることのできない、「自分の場所」である「二階」へ持ち込んでも、操縦することができない。

蓄音機ぐらい掛けられない奴がどこの国にあるもんか。大丈夫だからちよいと二階へ借りて行きます。」(略) 母と妹が交る毒ずくのを尻目にかけながら、章三郎は悠々として箱を二階へ運び去つた。例の窓際に机を据えて、その上へ機械を組み立てようとしたが、正直を云うと、彼は母親にうまく図星を刺された通り、今まで蓄音機と云うものを扱つたことがないのであ

る。大概分るだろうとたかを括って居たものの、さて実際にあたってみると、案外面倒なものらしく、なかなか思うように機械が動いてくれなかった。(略)

「例の窓際」とあるが、当人にとってその「窓際」が「例の」と特定されるように特別な意味を持つていることを物語る。潜在意識の中に、そこは唯一「希望」へ開かれた特別な場所、現実からの「脱出口」であり可能性につながる「窓口」と価値づけられている。しかし、彼にはその場所の持つ力を得ても妹の操る「靈妙神秘な機械」を動かせない。

「章三郎、お前何をして居るんだい、それご覧な、自分で出来るって云って置きながら、出来もしないくせに無理な事をしようとする壊しちまうよ。だから私が云わない事やありやしないんだ。やるなら下へ持つて来て、お富にやり方を聞いたらいいじゃないか。よう章三郎、そうおしつてばよう！」章三郎はかあつとなつて、遮二無二機械を廻そうと焦り出したが、何か組み立てを誤つたものか、どうしても針が具合よく音譜の上を走らなかつた。ほつと暑苦しい溜息をついて、額の汗を手の甲で擦りながら、恨めしそうに機械を眺めて居るうちに、彼は溜らなく悲しくなつて涙が一杯に眼に浮かんだ。

「馬鹿！こんな事件でなく奴があるか」彼は腹の中で自分を叱咤した。母や妹のような、哀れな人間と意地比べをして泣くと云うことが、彼には口惜しくてならなかつた。自分以下の人間に対して、彼はいつでも心の冷静を保つて居たかつた。

と、妹の足元にも及ぶことができない。失敗し、「病人」に教えを乞え、と叱咤される、みつともない「凡人」であることを晒している。そういった、末恐ろしいような、不思議な能力を周囲に感じさせていた、そういう少女であつたことが読み取れる。そういった他の三人が不器用な騒ぎを起こす最中にも、寝たまの床から、

蓄音機に関する争論も、結局お定まりの経路を辿つて、父親は面目なげに眉をしかめ、母はいまいましうに涙を拭つた。「大丈夫よお父つつあん(略) 臥て居るお富がこう云つて、両親の仲裁に入った。

というように、物事を収め征するような、奇妙な支配力を持つていたようである。『刺青』の中で本性にめづめてゆく娘の表出する、怪しい空気圧に連なるところがある。

「本当にお前のような乱暴者が、針の附け方も知らない癖に無理な真似をして壊してもしたらどうする気だい？内じゃお富

よりほかに、お父つつあんだって私だって、その機械に手も付けたことはありやしないんだよ」という、家の中で、ただ一人の特別な位置づけにあったことがわかる。

谷崎終平氏（前掲）の言にも、伶俐であつた妹園の様子が窺われる（『幼少時代』（昭和30「文芸春秋」）を引いた上で言及）。

母はそうして私が二十六七歳の青年に達する頃迄、ずうっとその白さを保っていたが、明治四十四年の夏、彼女がわが身に替えてもその回復を祈っていた長女の園に十六歳で死なれたとき、傷心のあまり一度に老けて白髪が殖え、顔に黄色味を帯びるようになった（『幼少時代』）

その長女お園が亡くなったのが明治四十四年の夏で十六歳だったから、私はその一廻り下の申年で四歳だった。庭に面した廊下で金鍔でトントンやってこの姉に叱られた憶えがある。（略）三人の娘の中では一番ましな顔をしていた。

父は家長としての力をもっていない、そういう中で母が「わが身に替えてもその回復を祈っていた」くらい可愛がつっていた妹お富が回復することは、母親一人の嘆きだけにとどまる問題ではなくその家の明暗を大きくわけることになる。それもあつて一層、誰もが心にそう願っていたとしてもおかしくはないはずである。それが叶えば必ずや運氣が開けて、すべてのことに光がさすような気にさえさせていたのではないだろうか。

・「財」という一文字

また、一度だけ「財」という文字が出てくる。「国中の罪と財の流れ込む都の中で」とあり「罪と財」を「ザイとザイ」と読ませず「ツミとタカラ」と読ませている。「清吉」は、自分の願望に忠実であろうとするため、あえて日陰の道を択ぶ。目の前の利・「得」には動かされず、「愚」という「徳」に身を捧げる人間である。「浮世絵師」から「刺青師」に「墮落」し、また、彼の注文に合わない仕事はしない、という風にことわっているならば、連動して

「国中の罪が流れ込む都」と際立たせた方が主題は生きてくる。通念的価値観を抹殺することで、その「残忍」な「快樂と宿願」がより引き立つはずである。しかし、「財」という一文字がここに出されてある。善悪・損得の通念を超えた理想世界を描こうとする中にも、現実的で「美しい者が強い」という観念世界の中に、現実生活の中で「経済力」つまり「財」が社会的「強」である、という作者の背景の現実的な認識が記されたものであると言える。

「愚」を「貴い徳」と謳い、時代設定も変え、同時代にはありえない観念世界を実現させようとする中に「書き手」の認識また求めていたものが露呈したものだと言える。一方『異端者の悲しみ』とは、「お園」でなく「富」の字を入れている。

また、次の表にあるように、「お富」は不思議な力を持つて両親さえ操っているようなところがある、とされている。

『異端者の悲しみ』における描写	『刺青』における描写
<p>その頃の彼女の容態は、今ほど重くなかったので、寢床の上に据わりながら機械をいじくるくらいの事は出来たのである。小さな、割げかかった一閑張りの机の上に機械を載せて、時々母に弾条を捲かせつつ、彼女は自ら針の附け換えに任じたり、音譜を円盤に嵌めたりした。</p> <p>「ふん、そりゃあ呂昇の壺坂だな……お富や、もう一遍今の奴をかけて見ねえ。やっぱり義太夫と云うものも、こうして聞くといいもんだなあ」</p> <p>四五日立つと、父も喧嘩を忘れたようにうつとりと音譜の声に耳を澄ませて、一合の晩酌を傾けながら好い気持になったりした。母は長唄が好きだと云って、伊十郎や音蔵の音譜を箱の中から捜し出しては、それをお富に掛けて貰った。病人の為めに借りてきた物が、却って親たちの慰みに使われるような観を呈して、肝心</p>	<p>こう云って、清吉は娘の顔と寸分違わぬ画面の女を指さした。</p> <p>「後生だから、早く其の絵をしまつて下さい」と、娘は誘惑を裂けるが如く、画面に背いて畳の上へ突つ伏したが、やがて再び唇をわななかせた。「親方、白状します。私はお前さんのお察し通り、其の絵の女のような性分を持つて居ますのさ。――（略）」</p> <p>一点の色を注ぎ込むのも、彼にとつては容易な業ではなかった。さす針、抜く針の度毎に深い吐息をついて、自分の心が刺されるように感じた。（略）その刺青こそは彼が生命のすべえてであった。その仕事をなし終えた後の彼の心は空虚であった。二つの人影は其のまま稍々暫く動かなかった。（略）</p> <p>「己はお前をほんとうの美しい女にする為に、刺青の中へ己の魂を打ち込んだのだ、もう今からは日本国中に、お前に勝る女</p>

な娘は機械を取り扱う技師にすぎない場合があった。二十枚ばかりのレコオドを毎晩飽きずに繰返して、始終娘が針を附けるのを見て居ながら、親父もお袋も一向にその技術を覚えようとはせず、初手から危なかつて手にだに触れなかつた。

痛々しく瘦せ干涸びた病人の少女が、重そうなドテラをかついで褥の上に起き直つて、静かに円盤を廻して居ると、その傍らに父と母とが頭を垂れて謹聴して居る光景は、どう考えても一種の奇観であつた。その時の娘の顔は、恰も不思議な妖術を扱う巫女のように物凄く、親たちは又、その魔法に魅せられた男女の如く愚かに見えた。そうして蓄音機と云うものが、凡人のあずかり知らぬ靈妙神秘な機械のごとく扱われて居た。

だんだんお富の病勢が募つて、自由に体を動かすことができないようになってから、代りの技師が居ないために機械は到頭風呂敷に包まれて、簞笥の上へ片付けられた。

『刺青』の娘は、「お富」と連なるような「不思議な瞳」に光を放つて、「私はお前さんのお察し通り、其の絵の女のような性分を持つて居ますのさ」と本性を認め、「美しくさえなるのなら、どんなにでも辛抱して見せましようよ」と、「身内の痛みを抑えて、強いて微笑」む強さを見せる。「お富」は「死ぬと極まつてい」ながら、強がつて厭味を言う。その姿は一層不憫であり、家族にとつて堪える。減らず口に対し「子どものくせに」と買ひ言葉が出ているが、明治当時の平均寿命が比較的短かつたことから、子だくさんであつたことも併せ、長子は若くして親を亡くすことも多く早くから「家長」「兄弟の保護者」的自覚を持った。まして十才も離れた彼女に対しては「兄」「妹」というよりむしろ「保護者」に近い感覚を覚えていたことのあらわれではないかと思われる。その彼女を見つめて「章三

は居ない。お前はもう今までのような臆病な心は持つて居ないのだ。男と云う男は、皆なお前の肥料になるのだ。：（略）
こう云われて娘は細く無意味な眼を開いた。その瞳は夕月の光を増すように、だんだんと輝いて男の顔に照つた。（略）
「美しくさえなるのなら、どんなにでも辛抱して見せましようよ」と、娘は身内の痛みを抑えて、強いて微笑んだ。
「ああ、湯が滲みて苦しいこと。……親方、後生だから私を打つ捨て、二階へ行つて待つて居てお呉れ、私はこんな悲惨な態を男に見られるのが口惜しいから」娘は湯上りの体を拭いてもあえず、いたわる清吉の手をつきのけて、激しい苦痛に流し呟いた。女の背後には鏡台が立てかけてあつた。真白な足の裏が二つ、その面へ映つて居た。昨日とは打つて変わった女の態度で居ると、凡そ半時ばかり経つて、女は洗髪を両肩へすべらせ、身じまいを整えて上がつて来た。（略）
女は剣のような瞳を輝かした。その耳には凱歌の声がひびいて居た。

郎」が直接話法でもって「悲しい」や「可哀想」とは言っていない。しかし、このようにむしろ客観的にその姿をくつきり描き出す行為が何よりの証左であるとともに、このことで感情はむしろ浮き彫りにされてある。『刺青』において「すべて美しい者は強者」と言わせたように『刺青』においては「美しい」は「強い」と読み替えることができる。望みがあるのなら「美しく（強く）さえるのなら、どんなにでも辛抱してみせましょう」と「意地っぱり」の「妹」は言うはずである。

・「自分の心が刺されるよう」……「残忍」の減速

また、『刺青』の冒頭では「残忍」な願望を持っていたとその異常性を強調していたはずの「清吉」が、「娘」に接してからはまったくその「残忍」な異常さをみせず、真摯とさえ見えるのは相手に対してもっている感情を物語るともとれる。「一点の色を注ぎ込むのも、彼にとつては容易な業ではなかった。」という真剣さで向かい、不思議なのは、自分が刺青を刺す側でありながら、「さす針、抜く針の度毎に深い吐息をついて、自分の心が刺されるように感じていることである。」「相手を刺し」ながら、「自分が刺される」ようにという心理は妙である。表現は、刺された「娘」は血を流さず、「彼の命」が「したたり」となっている。自分以外の人間が刺されているとき、自身の身を切られるように感じるのはどのような時であろうか。「残忍」な願望に「云い難き愉快」を感じ「無残な姿」を「いつも」「冷やかに」見下して「快さそうに笑って」いた清吉の「いつも」に反する。相手に対する労わりの情を内包しているかのようなのである。そして、「その刺青こそは彼が生命のすべてであった。その仕事をなし終えた後の彼の心は空虚であった。」と、自分を分け与えたかのような心境で、娘に向かっている、という変化が見られる。「娘」を眠らせて後は（それ以前より）、その若い肌に手さえ触れていない不自然さがある。作業上、触れているはずだが、書いていな

い。他でもない、その手ざわりを記していない。セクシャルな表現は少ない。刺青を彫り上げることは、かつての彼には残酷な「悦び」であつたはずであるが、ここでは「仕事」という言い換えがなされているのが興味深い。「悦び」と「仕事」は全く別のものである。少なくとも彼にとってこのときの「刺青」は「いつも」のそれとは全くちがうと認識されていたことを露呈させている。ここでは、「清吉」は「仕事」と呼ぶようなある種の「使命感」に近い感情をもつて臨んだ、ということの証左である。また、「すべてをうちこ」みながら、その先は関ろうとせず、「娘」へセクシャルな執着はしない。理想どおりの女になりながら、彼女を束縛、愛玩しようとはしていない。この点にも考察の余地はある。

・「一階」と「二階」……空間の意味するもの

また、『異端者の悲しみ』では「お富」が決して自力では上がってくることでできない「二階」に、『刺青』の「娘」は連れて行かれていく。そして「外へ向かつて開いた窓」をもつその「二階」の場で「命」ともいえるエネルギーを与えられている。みんなが「二階」に上がると残された「お富」は寂しがったが、「一階」で、一人で痛みを乗り越えようとする『刺青』の「娘」は、敢えて清吉の手を振り払い、自分から彼を「二階」に追いやる。そして「痛み」を乗り越え「刺青」つまり「美しさ」という名の「強さ」を自分のものとしたあと、自分の足で開けたる場・生命が在る場所である「二階」へ上がってくる。読み手にとっては、単に物理的構造を示す「一階」と「二階」であるが、間室家つまり谷崎家にとつてのそれは、深い意味があつた。それらはまったく違う意味を持った空間であつた。その「二階」という場で「刺青」つまり「美しさ」という「女の強さ」を「清吉」という主人公が身を切るように「注ぎ込む」という行為は、死を感じさせる空間「一階」にしか棲めない妹が騒々しくも希望へのとば口である

「窓」を持ち生命を感じさせる「二階」へ上がってやることさえできたなら、自分たちの持ち合わせる「命」の力を「注入」してやれるのではないか、という一縷の望みが妄想させた「構図」であつたとは言えないだろうか。

健全な精神状態を保っている者にとつては知り得ないが、「神経」を病んでいる者にとつて、閉所（塞がれた空間）と、外界に通じる「開口部」つまり「脱出口」がある所とは天と地ほどの違いをもつ。外界への通路をもつ場では精神の救済を得ることができるのである。これを踏まえて、『刺青』『異端者の悲しみ』において頻繁に「一階」「二階」（窓）と空間を区別していることに着目すれば、より各々の場面は意味深いものとなる。

三、妹へ向けられた悲しみ

前記のように、妹「お富」は当時「間室家」つまり谷崎家において、不治の病にありながらそういった不思議な能力を備えて一目置かれるような存在であつたことは間違いない。

しかし、その一方でやはり無力な存在であつた。それは、なにより生きる選択さえも許されないことに象徴される。たとえ、「恰も不思議ない妖術を扱う巫女のように」に「物凄く」とも、家族の誰一人としてさわれない「凡人のあずかり知られぬ靈妙神秘的機械」を操ろうとも、それ以前の、「凡人」たちが持ち合わせている自由が彼女にはなかった。「死ぬことが極まってい」て、「生きる」自由はないのだ。自ら「異端者」と名乗りながら、ひとくくりに「凡人」と分類している点は興味深い。作中での「凡人」とは「生きる」人間を指してもいる。「二階」は章三郎の居場所である。そこは、決して清らかではない。

「二階の部屋には西日がぎらぎらとさし込んで」おり、章三郎が「例の如く大の字なりに倒れたまま、体中にびっしり汗をかいて、午睡を貪」る空間である。汚いが、それでも生命力を感じさせる。そして、

ふと、梯子段にみしみしと云う足音が聞こえたので眼を覚ました。「そりゃ己だって、病院へ入れてやりてえことはやりてえけれど、金がねえものはしょうがねえやな。」歟呟れた声で、囁くように云いながら、章三郎の臥ている部屋へ這入って来たのは父親である。(略) いつも、病人に聞かせられない相談があると、父とは母こっそり二階へやって来て、ひそひそ耳打ちを交わす

というように、金のことでいさかいをしたり言い訳をしたり、「凡人」がその愚かしいお粗末さを露呈させる、といった「日常の営み」を繰り返る場所として「二階」は捉えられている。

「それにお前、助かるものならそりゃ借金をして迄入院させてえ法もあるが、どの路助からねえと極まったものを、それ程迄にしたところで結局無駄な話だあな。何しろあの状態じゃ入梅明けまで持つかどうか分らねえって、医者はその云って居るくらいなんだから、可哀それでも今更しようがありやしねえ。……、まあまあそれもこれも、みんなあの子の寿命だと思つてあきらめるのよ」(略)

……河村の照ちゃん死ぬ時だって、ちゃんと日本橋に話をして、順天堂へ入れて貰つたじゃありませんか。助からないから放つて置くなんて、あなたのようなそんなそんな、不人情な親がどこの国にあるもんじゃない。……」(略) よくよくお富に運がねえんだ。そりゃ、贅沢を云つた日にゃあ、大学病院に入れるとか、青山さんに診て貰うとか、際限のねえ話だけれど、そうしたところがつまりはまあ、助からねえと知りながら気休めの為にかねを使って見るだけの事で、貧乏人が無理算段をして迄も、真似をするにや及ばねえ事なんだ」

妹の死の間際にも、みっともなく「生きてゆく」彼らによつて日常はこういった諍いや痴話喧嘩が日々繰り返り広げられているのである。そういう「場」として「二階」は据えられている。階下「一階」には病人がいる。いわば「二階」が生命の営みのある「生の空間」とすれば、「一階」は「死ぬことが決まっている」病人の棲む「死の空間」といえる。そして、「死の空間」の住人は、汚くとも外へ向かつて「窓」が開いていて生命の可能性のある「二階」へは上がってくる事ができない。「生きる」人間だけが、「一階」と「二階」を一本の「梯子段」を薦って行き来することを許されていることになる。主人公「章三郎」は「神聖」でありながら「絶望」を意味する「一階」でできない「下

世話」な営みをしに「二階」に上がり、それをすませたらまた病人のいる「一階」へ降りてゆく。「お富」はたとえいくら「惻惻」であり理屈を言ったとしてももうすぐ死のうとするその間際にも、金の算段で治療が天秤にかけられることに示されるくらい、哀れで無力な存在である。「子供のくせに」という文言にも表れている。「生きる」人間の後を追って、彼女が「生の空間」である「二階」に行くことはできない。彼ら「生きる」者たちが「二階」へ行ってしまうとなすすべがない。多分得体の知れない不安感にさいなまれるのであろう、お富は癪癪を起こすのである。

その時階下の病室で、「かあちゃん、かあちゃん」と呼び立てるお富の声が聞えると、母は抛ん所なく談判を切り上げて「あいよあいよ、いま母さんは下に行くよ」と云いながら、あわてて目の緑の涙を拭いた。「それ、それ、又已たちが二階に居る」とお富の奴が氣にするから、早く下に行つてやりねえつてことよ。泣きつ面なんぞしなさんなよ見つともねえ！」

「かあちゃん、かあちゃんてば！みんな二階に行つては、あたいが淋しいじゃないの」

「あいよ、あいよ、今行きますよ」梯子段を降りて行く母は、まだシクシクと鼻を鳴らして居た。

章三郎がガミガミ言われながら蓄音機を「二階」へ持つて逃げるのも、どんなに彼女の「居場所」「二階」で口が立つてもそれが到底彼女の「追いつけない場所」だからである。

・「妹比べ」

そんな中、章三郎は友人の葬式で、

「……しかしあの妹はいい器量だなあ。鈴木が生きてる時分に、妹の噂は聞いて居たけれど、あんな綺麗な女だと思わなかったよ（略）」

という会話に出くわす。それは、居合わせた章三郎の「妹」に及んだ。

「妹と云えば君の妹も長い間煩つて居るそうじゃないか。どうだい、ちつとはいいい方なのか」「いや駄目だ。とても助からな

いんだ。もう長い事はあるまい」(略)

「・何しろ、間室の妹と云うのは、兄貴に似合わぬ美人だそうだけ。肺病なんぞになる女は、大概昔から美人に極まって居るもんだから、見ないでも様子は分かつて居るさ。年が十六で、生粋の江戸っ児で、おまけになかなか伶俐な娘らしいから、事によつたら鈴木の妹よりいいかもしれない。どうだい一つ、お得意の交際術を発揮して間室のところへ見舞いに行つたら」。「いくら美人でも肺病はご免こうむるよ。病気が治つたら交際術を用いるがね」

「病気が治れば、僕は妹を芸者にするから、そうしたらOにかわいがつてもらおうか。実際それやあいい女だよ。妹の器量を褒めるのもおかしいが、あんな顔立ちはちよいと珍しいね。」章三郎は直ぐと図に乗つて、こんな出鱈目をしゃべり立てた。

『刺青』の「娘」は近々座敷に出ることになっているが、章三郎は「出鱈目」に「お富を芸者に」と言っている。この場面では、自分に対する友人の「反感」をかわすことをもくろんでゐるとあり、このような他人の健康で美しい妹と自分の「お富」との「妹比べ」に際して、ことさら抱いた感情は記されていない。少し前までは、伶俐で憎まれ口を利いていた「お富」も、ついには、「四五日前から急に容態が險悪」になり氣力を失つてゐた。

朝の七時に勤め先へ出て行こうとする父親を呼び止めて、「お父ちゃん、何だか私、今日は淋しくて仕様がなから何処へも行かずに云ておくんな。ねえお父ちゃん。」と、例になく悲しい声で甘えるように云つた。章三郎に罵られる程生意氣であつた病人は、その頃めつきり氣力が衰えて、七つ八つの子供時代の愚かさに復つて居た。晩になると、一人で寝るのが嫌だと云つて、父親の瘦せた腕に抱かれて眠つた。彼女は父親に抱かれてさえ居れば、よもや死ぬことはあるまいと信じて居るようであつた

ことさら、どのような心境へ動かされたか、という直截的記述はない。しかし、このように「妹比べ」の会話を明記し、確かに妹の姿が彼によつて記されている。感情を表現する直截的記載がないが、この不憫な妹の姿が描写されていることが何よりの証左である。決して素通りはしていない。「妹」の呼称は、時に「病人」となる。また、件の「蓄音機」であるが、これを「お富」に貸したのは、いとこの娘である。

お葉と云うのは章三郎の叔父にあたる親戚の家の娘であつた。章三郎の一族が日に増し悲境に沈んで行くのとは反対に、十年前からだんだん身上を太らせて、今では日本橋の大通りに立派な雜貨商の店を開いて居た。文科大学へ通つて居る章三郎に、四五年前から學費を貢いでくれるのも、去年の春以来病み通しのお富の為に医薬を供してくれるのも、みんな日本橋の叔父のお蔭であつて、八丁堀の一族は悉く彼の庇護を仰ぎながら、辛くも糊口を凌いで居た。お富の母が病人から頼まれて借りに行つたのは、もう半年も前のことである。「ねえお葉ちゃん。濟まないけれどもお前さんの蓄音機を四五日貸しておくれでないか。お富が毎日、淋しいもんだから、借りて来ておくれつて云うんだけれど」「ええよござんす。持つていらつしやい」と、お葉はよんどころなく承知した（略）

立場も、繁榮ぶりも、章三郎一家ひいては娘同士の「お富」にとつて対照的である。この「お葉」の洋々たる有り様も、こうして確かに彼によつて記されている事実が重要である。このことで更に浮き彫りになるのはお富の不運であり、この皮肉な対象を鮮明に書き出しているのは、それを強く意識している書き手に他ならない。「お富」が死ぬ間際、骨と皮だけになって死のうとするのに対し、「お葉」を「嫁入り前の、華やかな高島田に結つた」姿で登場させ「病人」の「耳元へ口をつけて」呼びかける皮肉な「対比」が鮮明に描かれている。

「お富ちゃんや、お富ちゃんや、兄さんが歸つて来ましたよ」（略）

彼女は唯、賢い犬のように瞳を上げて、じつと章三郎の顔を見入つた。

「お富、お富、何でお前は己をそんなに睨めるのだ。この間己がお前を叱つたのは、ほんの一時の腹立ち紛れに過ぎないのだ。どうぞそんなに睨まないで、もう好い加減に免してくれ。己はお前の兄じゃないか。己だつて今日は胸騒ぎがしたのだ。

……」（略）

一方の「お富」には「あああ、あたいはほんとに詰まらないな。十五や十六で死んでしまふなんて、……」と言わせる。死に臨みながらも「賢い犬のよう」という様子は無念さをきわ立たせている。「お葉」の粹なしやべり方は『刺青』の「娘」の口調にも似ているが、一人前のはおり（芸妓）と、これから「妹分として御座敷へ出る」「娘」と

は、頼もしい姉御のような「お葉」と「お富」をも連想させる。

また、最終章の五章に至り、こうしてもう妹の死が決定的になった時期に来て、唐突に

その頃、Masochistの章三郎は、何でも彼の要求を聴いてくれる一人の娼婦を見つけ出した。その女に会いたさに、彼はあらゆる手段を講じて遊蕩費を調達しては、三日にあげず蜷殻町の暖味宿を訪れた。授業料だの教科書だのと云う名目で、日本橋の親戚から引き出してくる学費の凡ては無論の事、折角友情快復した友達仲間に、彼は再び不義理を重ね、揚句の果ては借りた本まで売り飛ばして、水天宮の裏通りのその女の許に通った。

という行が出てくる。そして、これ以降特にその女について触れられることはない。この女について書きたかったから、ではなく、その女を介してどのような心境を持ったか、それが書きたかったともとれる。そういう方面のシヨツクが強かったことを意味している、と解釈することもできる。病弱で幸薄い妹がまさに死に近づいているそのまぎわにこの「娼婦」を引き合いに出したこの唐突さの意味は何か。妹の命の消えようとするのを目の当たりにしながら、サディスティックな娼婦のエネルギーに触れたのだとすれば、たとえ家族には無慈悲な兄だとしても血の繋がった者として反射的に持つ感情があるはずである。不随意に動く感情といってもよい。妹とは対照的な、「娼婦」の、体さえ道具にして金を稼げるその凶太いタフさに思いが及びはしなかっただろうか。その時、どのような感情が沸くものなのか、それを考えてみても無意味ではないはずである。

伊集院静（第107回直木賞）に『乳房』（一九九〇年一〇月講談社）という小説がある。彼の私小説的作品の一つと位置づけられるもので、結婚後一年、癌のため二七歳でこの世を去った彼の妻（芸名…夏目雅子）の死に至る時期を描いたものである。自分と結婚したがっていた妻は、自分と長い時間一緒にいられるから「病気になって嬉しい」と言う。新婚の妻は病室で、見舞いに来た彼にあやまる。「どうしてるの、身体の方は？」「私が抱っこしてあげられない

から……」。「でもね、我慢できなかったら、遊んで来ていいんだよ」と言った妻は、パジャマのボタンを外して、自分の乳房を出して眺めている。「ちいちゃくなっちゃったな」。「私は妻のそばに寄って、パジャマのボタンをかけてやった。すると彼女は私の胸元へ犬がするように鼻を寄せた」と描かれる。思わしくない経過の中、あるとき、妻の病室で彼は入って来た看護婦とぶつかった。そして「私の二の腕にあたった彼女の弾力のある肩先」が「私をあどずさりさせた」とある。弱ってゆく妻の横で、たくましく働く彼女の若い生命力に触れ、不意をつかれたのだ。その後、彼はホテルで料金を支払って女性を呼ぶ。

上から見る女の身体は、腰の辺りの肉に段がついていた。(略) 私は女の上に乗っかると、乳房を掴み、肩の肉を掴んだ。色の黒い女だったが、それが女のたくましさを感じさせた。この女は健康なのだと思った。どんな男をも受け入れる健康な肉体が、私がかむたびに号令のようにあえぎ声を上げていた。病巢を拒絶する強い肉体を女は持っているのだ。それだけで、この女はゆるぎのない自由を持ち合わせている。私は里子があわれに思えた。悪い籤を引かされた妻とこんな自分が、情けなかった。肉体のかたちなどどうでもいいのだ。トランプの総とつかえのように、聡子の肉体とこの女の肉体をかえることはできないのか。

妻と妹とは、まったく別のものである。しかし、それらが「死ぬと極まった」運命と断定されたとき、何かそれらを超越した別の感情が生まれはしないか。「身内」として根底に湧き上がるエロスを超えた感情には共通したものがあらずである。それは、それらが他者として向こうにあるのではなく、「身内」として自分に属するものという認識のもとに生まれるものである。そして、そのさ中に、「別の」旺盛な生命力を持つ、「彼女らと同性の個体」に触れた時、どのような心の動きが生まれるものなのか、当事者同士であれば理解できるはずである。章三郎の「今のうちにどうにかしなければならぬ。えらくなるなら、今のうちにえらくならない」というエネルギーのぶつけどころと共に、「悲しみ」の感情は持つて行き場がないと自分への苛だちとして同化してゆく。苛だちはやがて

「怒り」に摩り替わり、その「怒り」は「弱さ」を憎み「悪」に裏つけられるほどの「強さ」を渴望するものではないだろうか。それが読み取れる。『刺青』の「すべて美しい者は強者であり、醜い者は弱者であった」という言説も、現実的な悲運のさ中であって示された文言である、という時間的事実をふまえたとき、新たな解釈も付与されてくる。

まとめ…『刺青』の役割について

・「空前絶後」の「はしがき」

佐藤春夫⁽⁸⁾は、「偽悪者潤一郎は自ら異端者と名乗っているが、その作にもその人の中にも一向異端者の面影は乏しいので寧ろこの周辺は骨肉に対して抱いている彼の温かい深い愛情の方が解かれずして表れている感がある」と、その正体を見破っている。また、吉田精一⁽⁹⁾は、谷崎が『異端者の悲しみ』に付した長い「はしがき」を「一篇の雑誌に発表する作品につけた文章として、谷崎にとつては空前絶後」と指摘し、それをさせたのは「それだけに彼がこの作品に心魂をうちこんだ」からであり、それは「文章のそこここにききとれ」「たしかに彼の生涯での記念碑的作品で」ある、とした。その「はしがき」には、肉親の谷崎終平氏（前掲）も胸打たれるものがあり、次のように記している。

兄に『異端者の悲しみはしがき』というものがある。「予」などという字を使って少々改まった硬い調子でもあるし、皆まで引用することもないので、ここに要点だけを書き直してみる（略）

私はこの物語の中で、亡くなった母や妹を決してえらい人間のように書いていない。彼らはえらい人間でなかった故に、骨肉の私の胸には、その死が一層悼ましく哀しく感ぜられる。彼らは定めし、えらくない人間として、どんなに憂い目つらい目に遭つても、もつと長生きしたかったであろう。死はNothingである。生は、兎に角、Somethingである。たとへいか程苦しくとも、NothingよりSomethingの方がいいにちがいない。（略）私はこのはしがきを涙なしには読めないのである。

このような強い思いに押し出され、『異端者の悲しみ』は書かれているのである。換言すれば『異端者の悲しみ』は谷崎にとって「そうまでしても書きたかったもの」といえる。それを念頭に置けば、そういう激しい思い入れによって書かれた『異端者の悲しみ』の終結部、不憫な妹の死の直後に『刺青』をもってデビューさせた、という組立ての意味はおのずと明白になる。『刺青』をもって文壇に登場した」と事実と反して付け足された理由は、『刺青』に終結部までの不幸を一気に払拭し、妹ひいては自分を含む一家の無念を晴らす、という意味を見ていたことになる。少なくとも、この作品『異端者の悲しみ』が書かれた大正6年の時点においては、明治当時から自らの経緯を展望する上で、『刺青』がそのように機能するものとして捉えられていた、と見なすことができる。この『刺青』に対する認識が『異端者の悲しみ』はしがき」にあるような強い思いに押し出され表出されてしまった結果といえる。

「そのこと」の「危険性」について後に思い至ったとき、新書版全集編纂にあたり、自ら削除するという「処理」に出たのである。とするならば、『刺青』はその悲境にある自分をも含む家族のために書かれた、という認識すらされており、そうなればその中に描かれた「怪しくも強い」悪に支えられた美貌の女を描くとき不運の犠牲者であり象徴のような妹さえもそうあれ、と願う渴望が明確な意識を持たないうちにもこめられていたということは十分考えられる。『刺青』発表時、現実には妹は死んでいなかったのに「妹の死」に添えた仕立てにしたのは、つまり「妹に捧げられた」のだという解釈もできる。描かれているのは決して妹の姿ではない。それを書くことは彼のポリシーでは避けるべきことでもあり、書こうとのぞみはしないであろう。書いている自覚はなかったであろう。むしろ、決してそうならぬよう注意を払っていたと想定される。描くのは、あくまでも理想とする「芳烈」で「怪しい悪夢」でありその実現である。しかし、その裏に「そう」（強く）ありたい、と強く求めるエネルギーがかきたてていた、という思いを巡らせた。

宮沢賢治の『永訣の朝』（大正11年）は、谷崎が妹を亡くした同じ26才で、妹としを喪った彼が字面通り「兄の思い」と「妹」を描いたものに他ならない。「ありがとうわたくしのけなげないもうとよ」余す所なく、ストレートに表現されている。熱で苦しむ「けふのうちに」とほくへいつてしまう」いもうとが、最後のわがままを言う。死ぬ前に彼女の望んだのが「あめゆじゅとてちてけんじゃ」というふた腕の雪それだけであった。異質なようであるが、『異端者の悲しみ』のお富のように、彼女が最後に言ったわがままが「糞こ」であったと同様、「死ぬと極まった」病人のわがままとは精々このようにささやかなもので、これらは切実に彼女らの宿命の悲しさを象徴している。極論となるが、たとえば『刺青』において、「図らずも」「強い」娘を造型させたのが、正反対の宿命にある妹への思いであったとするならば、根底に流れるものは「永訣の朝」と通じるという理屈さえ成り立つことになる。「自己の生活の直接の救済を念願として書く」ことが中村光夫のいう「私小説の正道」であるならば、「妹」への思いが込められているとすれば、『刺青』は「私小説」の精神の存在をみて、宮本徳蔵氏が「自然主義作家谷崎潤一郎」の可能性を主張するほぼ同時期に、重ねてその可能性を擁護することになる。しかし、一方でそうならぬよう望み、排除していたという作者の意思をも支持するところであり、明らかな自覚のもとに「妹」へ向けられていた、という姿勢はむしろ否定したいと思う。

『刺青』は当時の自然主義の全盛に倖差して異空間といえる世界を描いてみせた。しかし、夢うつつの生活の中から、その人生とはまったく関係なく、ぼんやり生まれてきた「絵空事」では決してない。その背景には、それを押し出す強い負のエネルギーが憤懣していた。本性に目覚める魔性の女。これはエロスで論じられてよい。ただ、「美」という「強さ」を得て、現実を百八十度逆転させる、この設定においては、夢見がちに空想上の人物に架空の振る舞いをさせたのみに終わらせるべきであろうか。特定の人物に当てはめるものではないが、他者かもしくは自己に属す

る要素かという二択において、後者と認識されるものに「強さ」を課せられているとき、漠然とそのような構図を求めさせるような現実がなかった、と断言するのもより難しい。込められた思いに言及することは『刺青』の解釈を変えうるものではない。『異端者の悲しみ』終結部の削除の意味と、「妹」と「娘」に見た描写の近似等を含む以上の考察は、多面的な解釈を『刺青』に付与するに留めたいと思う。しかし、今までの読み方にそのような背景を付与せるのも『刺青』の意義を深めるものではないだろうか。

註(1) 「刺青」「少年」など創作餘談（その二）紅野敏郎・千葉俊二（『資料 谷崎潤一郎』昭和五五年七月 桜楓社）所収

- (2) 宮本徳蔵「潤一郎ごのみ」平成十一年五月三〇日 文藝春秋社
- (3) 中村光夫「神童・異端者の悲しみ」『谷崎潤一郎論』昭和二七年十月 河出書房
- (4) 笠原伸夫「異端の内質」『谷崎潤一郎——宿命のエロス』昭和五五年六月 冬樹社
- (5) 石割 透「谷崎潤一郎の初期作品」『日本の文学』昭和六三年五月 有精堂出版
- (6) 谷崎終平「懐かしき人々 兄潤一郎とその周辺」平成元年八月十五日 文藝春秋社
- (7) 谷崎精二「明治の日本橋 潤一郎の手紙」昭和四二年三月 新樹社
- (8) 佐藤春夫「潤一郎、人及び藝術」『谷崎潤一郎読本文芸臨時増刊』昭和三一年三月
- (9) 吉田精一「異端者の悲しみ」『谷崎潤一郎研究へ近代文学研究及書』荒正人編 昭和四十七年十一月 八木書店

当日会場にて早稲田大学千葉俊二先生、京都大学藤原学先生より頂きましたご質疑に口頭にて返答申し上げました内容は次の要旨です。心より感謝申し上げます。

設定（清吉の寓居、「娘」を見かけた場所）が深川である点に関しては、「平清」が負うところが大きい。「平清」は深川に大きな店を構えており、「平清」といえば深川という印象があった。「平清」というのは、単に料理を出す、というのみでなく、最初に店内に湯殿を設けた料亭であったことに意味があるのではないか、と思う。「平清」に行く客はまずしつらえられた豪勢な風呂で湯を浴びて、用意された浴衣に着替え座敷でくつろぎながら食事をした。「平清」といえば、それまでなかつ

たスタイル、最初に料理茶屋内に湯殿を設けた料亭であり、それゆえにそれが付加価値となって、江戸料亭における草分けたる地位を得た。当時「平清」へ行くことは料理のみならず湯を浴びることをも意味し、またそのような非常に贅沢な店であり優雅な行為であることの象徴である。「刺青」における「平清」とは贅沢の代名詞としてよい。谷崎終平氏が日本橋の豪邸の様子を描きながら、それでも内風呂はなく銭湯にいったと当時風呂を持つ家がめつたになかったと記されていることを述べたが、「平清」の風呂の豪勢さが想像できる。作中湯殿の設定とともに、籠のかけから「娘」の「素足」が見えたくだりに関しても、店内で湯を浴びた女性客はだして足袋をはかず「平清」の店先より駕籠に載るのも不自然な行為でなく、自然によく見られた光景ではないかと思われる。「平清」店先の駕籠で見かけた素足、湯殿の設定、湯殿の鏡、娘の素足の印象、といった設定は、「平清」を介して一連のイメージでつながっているのではないか、という解釈をしている。

（追記 また正面玄関に「駕籠」で乗りつける他、深川土橋の「平清」には川の側より船で乗りつける風雅も喜ばれていた。清吉の「大川の水に臨む」「二階座敷」に「日はうららかに川面を射て」「八条の座敷は燃えるように照った」り、「水面から反射する光線」の描写、「月が対岸の土州屋敷の上にかかって、夢のような光が沿岸いつたいの家々の座敷に流れ込む」様子や、「上り下りの河舟の櫓声に明け放れて、朝風を孕んで下る白帆の頂から薄らぎ初める霞の中に、中洲、箱崎、靈岸島の家々の薨がきらめく」といった光景は、「平清」の川に面した座敷のイメージと重なるものがある。）

また、「異端者の悲しみ」において病人が行き来できなかつた「二階」と「三階」を「娘の手をとって」とあるが、弱き者の「手を引いて導く」といった気持ちを読み取るとともに、それが（「足腰も立たない病人」（『異端者の悲しみ』）には上るのが困難な、「急な梯子段（同）」と書き手が想定していたと読める。「娘」を「二階」へ上げ、「強さ」たる「刺青」を注ぎ、階下での一人での闘いを終えた「女」は自らの足で開けた「二階」に上がってくる。そして他でもない「窓際」で「欄干にもたれ」外へ開かれた「大空を仰」がせている。「二階」にさえることができる、といったすがすがしい願いが存在したとはいえないだろうか。また、「刺青」つまり「美」という名の「強さ」を彫る人物の名が「救い」を意味するもの、実人生で自分を認め落伍から救ってくれた稲葉清吉先生と同名であることは不慮の重複でありえない。先生ならば妹をも救ってくれるのではないか、といった思いはなかつたであろうか。美談にしたいという感傷ではないが、この設定にも単に架空の行為をとらせたとせず意味を見出したい、という希望をもっている。

また、発禁を考慮して「肌」を「皮膚」に直すなど、描写には相当の制限が課せられたようであるが、それを加味しても、

清吉は冒頭より「人知らぬ快楽と宿願」を持ち残忍に愉快を感じる、とことわりながら、いざそれを果たす場面でそれが描かれていない。これは彼の中で「別もの」である証左か。旧友伊藤甲子之助氏は当時谷崎が刺青についてずいぶん勉強していたことを後に語っているが、たとえば冒頭で「殊に痛い」「ばかしはり」を喜んだとしながら、それを施すむごい場面を描いていない。ばかしはり痛いのは、肌の下でばかしを作るために、いったん突き入れた針を抜かないで肉を崩すように針先を皮膚の下で弾き色を散らすからである。そのため、若く引き締まった肉と皮膚の持ち主でなければ施せない手法で、老いて弛んだ皮膚では不可能である。また、そのばかしを美しく出すためには、肌が張り詰めている必要があると共に、白くかつ透明感があることが望まれる。それについても「平清」で見かけ「躍りたつ」ほどの興奮を与えたほどの足の持ち主、十六歳の少女の美しい肌はまたとない「素材」であり、彼の「愉快」を存分に描き出す格好の条件がそろいながら、そうした実行をさせていない。針を指す毎の性的興奮の様子がなく、相手を「刺して」いながら自分が「刺され」ていると感じているのも奇異。冒頭でその「要望」を示した仕立てから見ても、バランス的にそれを受ける形で実現させてもよいはずであるが運動させていない。これらの「減速」に意味はないだろうか。「背面」に彫るということで「娘」は打つ伏せて「顔」を見せていない。構図的に華麗さを求めたとも取れるが美しい顔と同時に眺めることができる正面に彫るという可能性もあったわけで、つまりその「娘」の顔が見えないほうがやりやすい、というような感情がふと去来したのではないか、という憶測も持った。

註 平清の祖先丸山氏は越後の者で宝暦（一七五一―一六四）頃に江戸に上がり、堺町の芝居茶屋の飯焚に住み込み、手先きが器用な処から同町付近へ小料理屋を出し、二代目丸山氏が、文政四年（一八二二）に深川に遷って、堂々たる家造ったので、開業の摺物は蜀山人が筆を揮って、その文中に「湯治場料理新店相始め」云々と記してある。当時は今日の如く料理茶屋に風呂という物が設けて無かったが、此時平清が初めて浴場をしつらえて客を迎えたので、之れが当時の好奇心をそそって人気を博し、遂に八百善と共に江戸料理界の覇を争うほどの名家になったのである。『江戸のくらし・料理人の心意気』

三谷一馬 「料理屋の風呂場」『江戸庶民風俗図絵』一九九九年五月三〇日（南三樹書房）

※本稿は、去る二〇〇五年三月二四日 第十一回谷崎潤一郎研究会（於：専修大学）における口頭発表に修正を加えたものです。会場にてご教示下さいました先生方に深く感謝申し上げます。